

「昭和村は、一週遅れのトップランナーになる可能性を秘めています」。

今春、村が主催したシンポジウムに参加した県観光開発公社のW部長が口にした言葉が印象的だった。

高度経済成長期には最後尾を走っていた昭和村だが、時代の価値観が変化した今日、先頭ランナーに躍り出る基礎条件を備えている、というのだ。

昭和村に移住して四カ月余の私だが、まったく同感である。二十一世紀に向けて、これほど可能性にあふれている場所は珍しい。私が奥会津地域に感じている魅力を列挙してみたい。

第一に、森林の豊かさである。昭和村の面積の約八〇％が森林だ。「森」が自然の大気浄化装置であり、生命活動に不可欠な酸素の供給工場であることはよく知られている。都会が「コンクリート砂漠」と化してしまい、大気汚染や環境破壊が深刻なものに比べ、農山村の優位は歴然だ。



### 農山村の優位

入りの「天然飲料水」を、村人たちは洗濯や風呂の水に使っているのだ。何となくうぜいたくな暮らしだろう。塩素処理されたまじい水道水を、わざわざ人工的に浄化して飲んでいる都会人に比べ、その優位は歴然としている。

第三に、高齢者の元気度である。昭和村は高齢化率が三〇％を超える。が、暮らしているお年寄りの姿は、都会に暮らすお年寄りよりも格段に元気だ。山菜採りや魚釣り、農作業などは、大自然が与えてくれた福祉施設だと言つてよい。都会のサラリーマンのように定年がなぐ、しかもマイペースで仕事や趣味に興じられるので、健康にはすこぶる良いようだ。

施設に押し込まれて生気を失ったお年寄りが多い都会に比べ、農山村は豊かな自然環境そのものが福祉の場といえる。

その優位は歴然だ。高齢化はマイナス価値ではない。昭和村は、山村が「高齢者先進地」となり得ることを実証しているように思う。

第四に、住環境の豊かさである。私は十畳間が三部屋もある、軒家を、月一万円で借りて住んでいる。東京だったら家賃だけで二十万円はするだろう。都会と農山村の所得格差が指摘され、都会から

藤森 弘



農山村に移住する条件として、「都会並みの所得がある職があれば」という声をよく耳にするが、冷静に考えてみれば、ばからしいことだ。家賃や交通費だけで都会と農山村の所得格差などは吹き飛んでしまつからだ。子供たちの教育の見地からも、広い家に住み、野山に遊べる農山村の優位は歴然としている。

第五に、情報通信の革命的な進歩による情報格差の解消である。TVやラジオはもちろんだ、最近ではファクシミリやパソコンなどが各家庭に普及し、都会と農山村の情報密度の差はほとんど無くなった。昭和村の花栽培農家の有志は、パソコンで市場動向を分析し、大きな成果を得ている。国会の騒動もTV中継される時代だ。日本中どこに暮らしていても、世の中の動向から取り残される心配は皆無だ。心身の磨滅が激しいコンピュータ・ソフトのプログラミングなどの仕事は、電話回線一本あればどこでもできるのだから、緑豊かな農山村の方が心身のリフレッシュが容易で創造的な仕事ができるに違いない。リゾート・オフィスの発想を生かせる基礎条件が農山村にはある。新しい職場開発が進めば、志のある若者は帰ってくるだろう。産業振興の見地からも、農山村の優位は揺るがない。

第六に、まだ数多くあるのだが、紙数が尽きてしまった。とにかく、農山村から都会へと向かった人々の流れが逆転する日が近いと予感するのは、私だけではないと思う。

(昭和村喰丸・フリーライター)